

### 3・11以降の世界を想像的に

切り拓いていく人

くにさだきみ詩集『死の雲、水の国籍』に寄せて

鈴木比佐雄

穀雨

穀雨のあと

ひとびとは 種を蒔く。

(かぼちゃ・ほうれんそう・きくなど etc)

1

くにさだきみさんは、いつも時代の苦悩に焦点を当て、それに寄り添いながら、想像力を駆使した批評性のある詩篇を書き継いできた。二〇一〇年に十六冊目となる『くにさだきみ詩選集一三〇篇』で半世紀を超える詩作の代表作をまとめた。さらに昨年の秋には十七冊目の詩集『オソロシイ星』を刊行した。その詩集を読んでもみると、くにさださんの批評性はより磨きがかかり、今の時代こそその批評性は最も必要とされるのではないかと思われた。その中から詩「穀雨」を紹介したい。

—— ええ お潤いでござんしたなあ  
—— 何ゆ植よんさりやあな ?

この雨

〈コクウ〉なのか〈カクウ〉なのか。

—— 福島あまあ えれえこつてござんしたなあ。  
—— 茨城や千葉へも放射能が降った言ようりま  
すなあ。

菠薐草にも菊菜にも

撒かれて拡がる「風評被害」

たしかに

NHKは「穀雨」と報道したのだったが。

福島でも茨城でも——

(わたしの畑でも)

蒔いたもの

撒かれたもの

の

濃度が 見えない。

「穀雨」は二十四節気の一つで四月二十日ごろのことで多くの作物の種を播くころだ。くにさださんは、二〇一一年三月十一日後の福島第一原発が水素爆発を起こし放射性物質がまだ飛散し

ている状況下で、「穀雨」は、「〈コクウ〉」なのか〈カクウ〉なのか」とNHKの報道姿勢に疑問を投げかけている。福島原発事故を機に多くの人が、NHKを始めとする報道機関が、原発の本当の危険性や原発事故後の放射性物質の飛散状況などを正確に伝えていないのではないかと疑念を持ち始めていた。原発事故の被害を出来るだけ小さく見せようとする国家・行政、電力会社などの情報操作に報道機関は立ち向かっていないのではないかと思いついてきた。くにさださんは、そのような報道機関の代表としてNHKの「穀雨」の到来を例年通りに伝える姿勢に「蒔いたもの／撒かれたもの／の濃度が 見えない」と批判しているのだ。放射性物質を含んだ雨をくにさださんは「カクウ」と造語し、二〇一一年の四月二十日は「穀雨」ではなく「核雨」に違いないのにどうしてその危険性をもっと伝えないのかと歯痒さを感じ

じている。このことは原発が日本だけでなく地球の四季を破壊するものであり、地球を「オソロシイ星」に変えてしまったのだと指摘している。くにさださんの詩の魅力は時代の抱えている苦悩の根源に迫っていき、それを垣間見せてくれるのだ。

## 2

新詩集『死の雲、水の国境』は、前詩集の「穀雨」という詩をもっと深めて展開していった詩集だとも考えられる。序詩「水の皮」から始まり、一章「死の雲」、水の国籍」十二篇、二章「首輪の記憶」八篇、三章「日の音」八篇の計二十八篇から成り立っている。序詩「水の皮」は、人間と地球が水なくしてありえない極限の姿をイメージ化している。

### 水の皮

「水の皮」であることに気付く。すると波が地球全体をおおう「水の皮」であり、涙も人間がこぼさないようにたえている「水の皮」であると想像力を膨らませていく。波は巨大な地球の細波のようであり、涙もまた悲しみが込み上げてきて人間の身体から溢れてくる一滴の雫である。波も涙もまた何か宇宙の意志によって生かされていることをくにさださんは、したたかに「じつと抱いている」という言葉で明らかにしようとしている。

一章の十二の詩篇は、東日本大震災・福島原発事故を経験しなければ決して生み出すことが出来なかったものだ。3・11によって世界の潜在的であったものが顕在化してしまったと、くにさださんの感受性は誰よりも強く受け止めている。冒頭の詩「木洩れ日」では、木が存在してからずっと太陽を抱きしめて生きのびてきたという。しかし金環日蝕の始まる直前に「木は 腕をほどいたの

ナミも ナミダも  
なんと

したたかな  
水の皮か。

へ 地球も 人間も

なんでんかんでん

水の皮あ着た

(まっこと)

しづてえ

生きもんですけん

こぼさないように じつと抱いている。

この詩の題名でもある「水の皮」をくにさださんは、漢字の「波」をさんずいと皮に分解すると

だった。太陽を抱きしめることを止めて腕をほどいてしまい後悔をしているようだ。「しまった!」という／風の叫びの聞こえそうな近さで」ということは、きつと風が木の代弁をしてくれたのだろう。木は金環日蝕によって、太陽の光のありがたさに気付くのだが、人間は金環日蝕を「世紀の宇宙ショー」のように思って、本来的な太陽への感謝を忘れているのではないかと語っている。人間は太陽であり自然エネルギーへの感謝の心を取り戻せるだろうかと問うているように私には思える。

詩「外臓」では、「心臓がへ内臓」だとすると／「外臓」は／皮膚だそうです」という認識を抱いている。くにさださんはへ内臓よりもへ外臓である皮膚で詩を書くのだと自らの詩の方法論を告げている。

詩「青い夕焼け」は、火星から福島をみると地

地球上の「この一角」が「被曝地」であり、放射  
性物質という怪物を「調教しよう」と焦っている  
のが見えてくる」と語る。線量計を近付けなけれ  
ば、地球がどんなに危険かを知ることのない世界  
になってしまったことを火星や黄泉の異次元から  
眺めようと試みる。

詩「死の雲」は、山村暮鳥の「雲」という詩を  
引用し、いま暮鳥が生きていたらどんな詩を書く  
かを想像して次のように記していく。

フクシマを

「死の街」といったら

大臣だって クビだったから

もしかして

「死の雲」なんて 言っちゃったら――

言った奴らはみんな

死刑だ。

でもでも

もしかして

暮鳥が生きていたら

きっと 書く。

「おうい死の雲よ

ゆうゆうと

馬鹿にのんきさうぢやないか

千枝子の方へゆくんか

平の方へ

どこまでゆくんだ。

(フクシマを死の街にして)

ずっと

アメリカの方までゆくんか

と。

(詩「死の雲」の後半部)

くにさださんは、山村暮鳥の詩の背景にあった  
茨城県、福島県、宮城県などの浜通りや阿武隈高  
地などの福島の山河が放射性物質に汚染されてし  
まった現実を暮鳥が見たら、どんなにか失望する  
か計り知れないと想像する。それだけでなくその  
「死の雲」はいつか「アメリカの方」へ行くこと  
を予言している。

詩「水の国籍」は、「雨は 何語で降ってくる  
の」というネルーダの詩を引用して、水の放射  
能汚染が国境を越えてどんなにか深刻な情況に向  
かっているかを暗示している。大陸の国々では  
川はほとんど「国際河川」だが日本はすべて「国  
有河川」だ。しかし日本の山河にはすでに中国の

「空中鬼」(酸性雨)やアメリカの「放射能雨」  
が降り注いでできている。くにさださんは日本人  
がネルーダから「雨は 日本語で降ってくるの」  
とか「雨は 何語で降ってくるの」と問われたら、  
なんと答えたらいいのかと読者である私たちに問  
うてくるのだ。この詩は世界の海や空気を放射能  
汚染させた福島原発事故の罪深さを他国の他者の  
視線で物語っている。

詩「雲の上の町 ゆすはら」は、龍馬脱藩の道  
にあった「神在居」を含む「ゆすはら」という自  
治体に作られた風力発電の風車を神々しい存在と  
して書き記している。

詩「泣き龍」伝説「くにさだきみさんの暮ら  
す総社市にある雪舟で有名な宝福寺の天井画の龍  
の伝説に触れている。

詩「除染」は、「ひとつぶの水が もしもわた  
しに造れたら」という汚染されたしまった水への

痛恨の思いから発想されている。放射能を簡単に「除染」することは不可能で、ただの「移染」でしかないことを語っている。

詩「クリンな朝の台所」は、オール電化の快適な台所と、タービン建屋の作業員が毎時四〇〇ミリシーベルト汚染水で被曝していることを対比させて、クリンなエネルギーの在り方を問うている。

詩「薔薇の交接」と「化けもの野郎に サヨウナラ」の二篇は、くにさださんが想像力を駆使して原発の毒性や原発を推進した人びとの奇怪な考え方を抉り出している。

一章の最後の詩「孤島のセオリー」は、日韓の領有権争いが続いている「竹島」の、古代から住み着いている植物の原種のことを想像的に記した詩で、国家間の紛争の愚かさを伝えている。

## 3

二章「首輪の記憶」八篇は、戦時下の岡山での暮らしを回想し、貴重な証言を具体的に書き記している。と同時に回想したことが現在の日本の様々なあり方に重ねられていて、戦時下の歴史が、いま別の形で繰り返されるような恐怖感も感じさせてくれる。

詩「首輪の記憶」では、戦争中の「へ犬の供出」をした 冬の日の記憶」のことを記している。詩「岡山空襲」の記憶から」は、焼夷弾と油脂爆弾によって岡山の空が「花びら」になってしまったことを刻んでいる。詩「二〇一〇年 夏の記憶」は、広島県府中市出身の小説家山代巴が戦前に拘禁された三次拘置支所跡の壁を探しに行き、その取り壊される壁から当時を想像する話だ。詩「黒い国民服」は、戦時中の国民服が色を変え再び大量の『制服組』という名の下で出現してい

ることを危惧している。詩「台所の戦争」は、戦前の台所に貼られた富山の薬売りが置いていった「食べ合わせ一覧表」から、現代のマスコミが流す発ガン性の有害物質を指摘する数多の食べ物の情報を「台所の戦争」と名付けている。詩「ホテルイカの自決」は、ホテルイカの「身投げ」から沖繩の「集団自決」を類推し、平和の意味を知る上で「集団自決」に人びとを追い込んだ記憶を照らし出している。詩「蜘蛛の闘い」は、蜘蛛が糸を流して巣を作るさまと女子サッカーのなでしこジャパンの闘いを重ね合わせて、この世で生きる意味を問うている。詩「闇の現」は、「完璧な敗戦だったのに／あの日——／玉音放送では／へ敗けた」ということばが／ひとことも なかった」という五行から始まる。この詩は戦後に日本人が自らの戦争責任を不問に付す「無責任体制」の在りようや戦後の闇市の世界の間人模様を記している。

三章「日の音」は、「日の音」、「静」とは、青く争うこと、「サラム（人）」、「人」<sup>サラム</sup>、じゃないですか、「芋虫の足」、「癌・告知」、「<sup>ただす</sup>糺の森」（私信）」、「——追悼——多田聡さんへ」の八篇からなっている。この八篇はくにさださんの想像力の源となるような刺激的な他者たちであるのだろう。それらの他者は過酷な境遇であっても誠実に生きて、突き詰められた言葉を紡いでいる。くにさださんはそれらの他者から学んだことをこれらの詩篇に記したのだ。最後に詩「日の音」を引用したい。全盲の山田さんがヨーロッパ旅行に行った話だ。「足。で／直に 感じ取って来たのだ。山田さんは——」という詩行は、私たちが物事を認識する原点である。また私たちの未来を指し示している言葉であり最も重要な行動原理だと私には思われた。今の状況を世界規模の想像力で語っている詩篇を、3・11以降の世界をどのよう

に切り拓いていこうか模索している多くの人びとに読んでもらいたいと願っている。

## 日の音

「観光とは 何ですか」とたずねた。

「見える」とは「見えない」とは

どういうことかを知りたかったから――」

と その本には書かれている。

そのとき

「踏みしめること」

という答えが返ってきた。と

その本には 書かれてあった。

全盲の山田さん<sup>\*2</sup>が

ヨーロッパの観光旅行から戻ったばかりの

それは

山田さんの 自宅を訪ねての取材であった。

ベルサイユ宮殿も

マリーアントワネットの暮らしぶりも

その生涯も――

おそらくは 歩いて

歩きぬいて

その――踏みしめるもの――

足。で

直に<sup>じか</sup> 感じ取って来たのだ。山田さんは――

〈暗い〉というのは

たぶん

〈日の音〉

盲目の目の奥に

踏みしめた数だけの

〈日の音〉を沈ませて 山田さんは

―― 座っている。

なにを踏んで 〈日の音〉を聞いたか。

わたしの

足は？

きつと そこで死ぬだろう 自分の居間でさ

え

(わたしは いまだに目で見ようとして)

地球というものを 宇宙というものを

〈日の音〉―― なんかでは

踏めないでいる。

山田さんの踏んできたのは  
〈日の音〉という 〈光〉に似たもの。  
踏みしめることで得る  
かれ独特の ヒカル認識。

その明るさの中に 山田さんは―― 座って  
いる。

\*

\*1 『あきらめない 全盲の英語教師・与座健作の挑戦』 山城紀子 著

\*2 沖縄県盲学校で二十九年間教師を続けた山田親幸氏

くにさだきみ詩集『死の雲、  
水の国籍』栞解説文  
鈴木比佐雄

コールスック社  
2012